

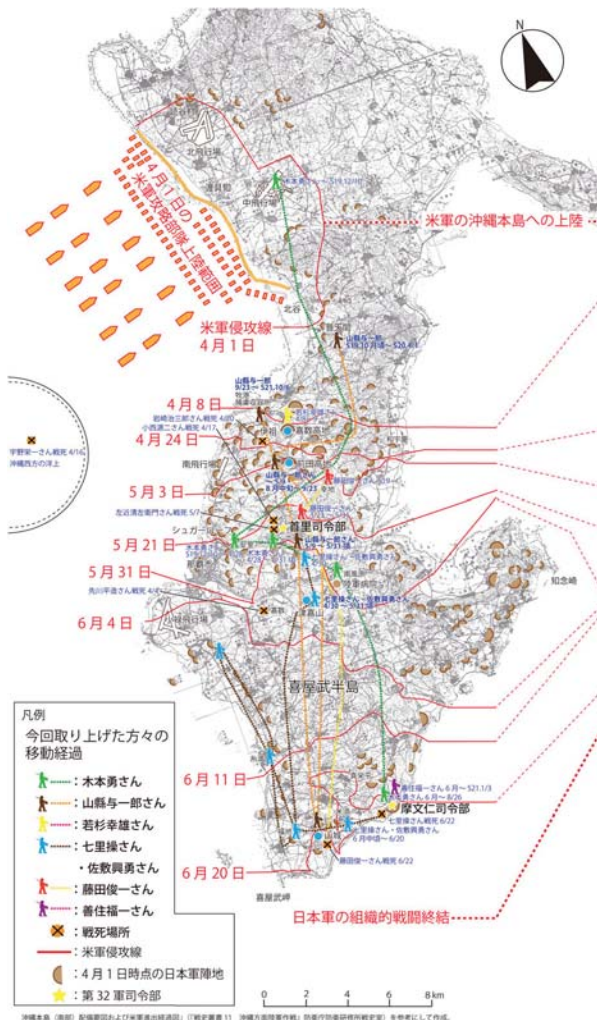


沖縄戦の経過



嘉数高地・前田高地の戦闘

沖縄戦経過図（今回取り上げた方々の戦争経過）



年月日	今回取り上げた方々の沖縄戦の経過
昭和十九年(1944年)	<p>3月22日 沖縄を守る第32軍が編成される。(第62師団はその主力師団)</p> <p>8月19日 第62師団(石部隊)が中国から沖縄へ移駐。</p> <p>8月~ 沖縄各地に飛行場や防衛陣地を構築。</p> <p>昭和二十年</p> <p>3月頃 この頃、歩1大隊(石)の本木勇さんは中興飛行場建設のために派遣される。</p> <p>10月10日 工兵隊(石)の藤田俊一さんは中興飛行場の沖向を構築。</p> <p>米軍による沖縄への大規模な空襲。那覇市などに大きな被害。</p> <p>輪重隆(石)の山縣与一郎さん、豊天院の陣地で空襲を受ける。</p> <p>11月17日 第32軍所属の第9師団の台湾転用が決まる。</p> <p>12月3日 第32軍が首里を司令部とする。</p> <p>12月10日 本木勇さん 歩11大隊(石)から第32軍司令部副官部へ向出。</p>
昭和二十年(1945年)	<p>2月 奥谷忠一さん(独立混成第44旅団) 沖縄で戦死。</p> <p>3月26日 米軍が沖縄の慶良間諸島へ上陸。</p> <p>4月1日 米軍が沖縄本島陸谷・北谷海岸へ上陸。山縣与一郎さんが普天間陣地で米軍上陸を自撃。</p> <p>4月1~4日 歩12大隊(石)が米軍上陸部隊と交戦。南部への誘導を意図して撤退。</p> <p>4月4日 先川平富さん。那覇市嘉数方面で戦死。</p> <p>4月6日 吉田徳太郎さん。沖縄への航空機による特攻で戦死。</p> <p>4月7日 宇野栄一さん。沖縄への特攻で出撃。飛行機の故障により九州へ帰還。</p> <p>4月8日 歩13大隊(石)と第62師団所属の各部隊が守る嘉数高地周辺の陣地(伊弉~高敷~和字羅)防衛線を米軍が攻撃。</p> <p>4月9日 歩13大隊(石)所属の若杉(小島)幸雄さん。嘉数高地で爆撃機陣により負傷。</p> <p>4月16日 宇野栄一さん。短気飛行機から沖縄へふたたび出撃。沖縄西方洋上で戦死。</p> <p>4月17日 小西謙二さん。首里にて戦死。</p> <p>4月19日 米軍が歩21大隊(石)の伊弉高地を占領。</p> <p>4月20日 歩21大隊(石)歩15大隊(石)が伊弉高地を襲撃するが撃退され、多数の兵士が死傷。</p> <p>若崎三郎さん。伊弉で戦死。</p> <p>4月21日 第62師団所属の各部隊が嘉数高地などから後方の陣地へ撤退。</p> <p>4月23日 第24師団が幸地(石)の東部の前線に投入される。(第62師団の前線範囲が前田高地以西となる。)</p> <p>4月26日 前田高地を守る歩12大隊(石)が米軍と交戦し、5月9日に撤退。</p> <p>~5月9日 山縣与一郎さんが前田高地で爆撃を背負い、疲れた戦車に休んだりする多数の兵士を召集。</p> <p>4月28日 木本勇さん。特別編成隊に配置され、首里司令部を警備。</p> <p>4月30日 七里操さん。第62師団より64旅団(石)司令部本部(津嘉山周辺)の通信分隊長として派遣される。</p> <p>5月7日 左近清左衛門さん。首里方面で戦死。</p> <p>5月12日 シューローフの戦い、18日に米軍が突破。</p> <p>~18日</p> <p>5月22日 第32軍が首里司令部を放棄し、喜屋武半島への撤退することを決定。</p> <p>5月26日 第62師団司令部が喜屋武村山城へ向けて撤退を開始。師団の各部隊も5月31日までに撤退。</p> <p>本木勇さんの部隊は首里から摩文仁へ。輪重隆(石)の山縣与一郎さん、工兵隊(石)の藤田俊一さんは首里から山城へ向けて撤退。64旅団(石)の七里操さんは津嘉山から福地へ向けて撤退。</p> <p>米軍が首里市を占領。</p> <p>6月11日 小嶺にあった海軍の沖縄方面艦隊基地が破壊。</p> <p>6月中旬 64旅団(石)が福地から米軍へ撤退。</p> <p>6月下旬 第62師団の各部隊が糸満市西部の山城、真栄平・摩文仁などで構衛。</p> <p>64旅団(石)司令部 米軍付込の隙で米軍の攻撃を受けて壊滅。七里操さん、佐敷興勇さんは直前に第62師団への連絡命令を受け、交戦中の摩文仁へ向けて移動。</p> <p>6月19日 藤田俊一さん。山城で米軍と交戦し、22日に戦死。</p> <p>~22日</p> <p>6月22日 七里操さんが摩文仁で戦死。第62師団師団長が自決。</p> <p>6月23日 第32軍司令部長官・長参謀長の自決。沖縄での日本軍の組織的戦闘が終結。</p> <p>善住雄一さん。糸満市長官らの自決に立ち会う。佐敷興勇さんが戦線を離脱。</p> <p>6月下旬 本木勇さん。摩文仁付近の陣地に潜伏。水くみ場で米兵にみつかり、攻撃を受けて負傷。</p> <p>~8月上旬</p> <p>8月中旬 山縣与一郎さん。山城から前田高地の壕へ移動中の夜、アメリカ軍の戦車を突く花火のような曳光弾を見る。</p> <p>8月15日 戦争終結の報喜が放送される。(玉音放送) 終戦。福島弥三さんの沖縄特攻が中止となる。</p> <p>8月中旬 山縣与一郎さん。前田高地の陣地に潜伏。</p> <p>8月26日 本木勇さん。壕内で兵士の自決に巻き込まれて負傷。投降し、捕虜収容所で治療を受ける。</p> <p>8月~ 9月下旬 山縣与一郎さんが潜伏する前田高地の壕へ米兵が頻りに降伏勧告に来る。</p> <p>9月7日 沖縄の日本軍の降伏調印式が行われる。</p> <p>9月23日 山縣与一郎さん。投降して牧野の捕虜収容所へ移送される。</p> <p>昭和二十一年</p> <p>本木勇さん、山縣与一郎さん、木保福一さん。沖縄から返り来た自宅へ帰る。</p> <p>昭和二十一年 若崎三之助さん、左近とみさん、藤田清さんたち。出征した家族の沖縄での戦死を伝える。知らせが早く。</p> <p>昭和二十二年頃</p> <p>平城二十年 沖縄糸満市摩文仁の洞窟での遺骨収集中、七里操さんの万年筆が見発される。</p> <p>平城二十五年 1月22日 七里操さんの万年筆が死後68年を経て、ご遺族のもとへ帰る。</p>

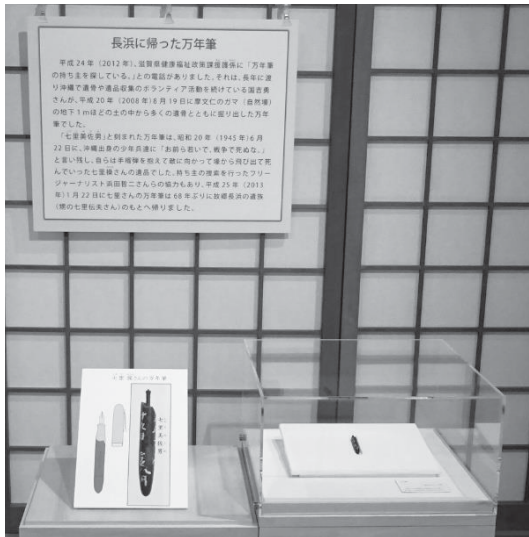
沖縄戦経過図



沖縄方面への特攻



帰郷 家族のもとへ



長浜へ帰った万年筆



沖縄県の戦後

【沖縄戦の経過】

バナー「沖縄本島へ上陸する米軍」で圧倒的な米軍の戦力を視覚的に示すとともに、戦争の経過について写真・図面を交えて解説した。

【沖縄へ従軍した滋賀県出身者】

戦況地図や年表を使って滋賀県出身の元兵士たちの沖縄戦での足取りを示した「沖縄戦経過図」で全体の概要を説明するとともに、部隊の沖縄への移動、嘉数高地・前田高地での戦闘、首里司令部の摩文仁への撤退、組織的な戦闘終結後（兵士たちが置かれた状況）、沖縄方面への特攻作戦について、凄惨な戦争の様子を元兵士の体験談や手記・関係資料を使って紹介した。また、戦争での沖縄住民の被害について語っている元兵士の体験談・手記も紹介した。

【帰郷 家族のもとへ】

沖縄戦では、従軍した兵士の大半が戦死されたことを、兵士の無事な帰郷を待った家族の体験談を使って紹介した。遺骨・遺品すら家族のもとへ帰っていない沖縄戦没

者を象徴する資料として、沖縄県の自然壕から発見されて68年ぶりに遺族のもとに帰った七里操さんの万年筆を展示した。

【沖縄県の戦後 慰霊と継承】

戦争が沖縄へもたらした、現在も続いている様々な影響・問題や戦没者の慰霊について、嘉数の丘のふもとに広がる米軍基地写真や平和の礎の写真をバナーとして象徴的に配置し、不発弾や米軍基地、沖縄戦没者の慰霊塔や遺骨収集などを紹介した。

第24回企画展示『写真週報に見る戦時下の女性』

会期 令和元年(2019年)9月29日(日)～12月22日(日)

会場 当館企画展示スペース

趣旨 戦争中、日本政府が国民に対して戦争への機運を高め、戦争へと駆り立てた政府のメディアである写真週報は、政府広報・方針を写真やイラストを多用し、分かりやすく国民に伝えるものであった。そこには男性の勇ましい兵士の姿だけでなく、労働力不足を補うため勤労働員に従事する女学生や銃後の暮らしを守る妻、戦場へ向かう従軍看護婦、地域を挙げて兵士を送り出す国防婦人会など、当時の政府が求めた女性像が写し出されている。

展示では『写真週報』に描かれた女性像と比較する形で、滋賀県での戦時下の女性の半生をモノ資料と体験談を用いて紹介した。



第24回企画展示チラシ

展示の様子

概要

【プロローグ 写真週報】

政府広報誌であった『写真週報』が何を国民に伝えたかったかを見学者に感じてもら

うことを意図して、写真週報の表紙写真やイラストを数多く紹介した。

【少女と青春の思い出】

戦時中の国民学校の教育や女学生の勤労働員・女子勤労挺身隊などについて、写真週報の記事（兵士への慰問絵はがきの児童の絵画や国民学校での軍用ウサギの飼育、滋賀県への集団学童疎開、軍需工場への勤労働員など）と、同様の経験をされた方々の当時の体験談・関係資料を比較して紹介することにより、戦時中の少女たちが軍国主義の学校教育によって、当たり前のように戦争への協力を受け入れ、満足な授業も受けられないまま、過酷な労働を強いられていた姿を浮かび上がらせた。



少女と青春の思い出



軍用ウサギの飼育



学徒勤労働員と女子勤労挺身隊



従軍看護婦

【戦時下の女性と職業】

兵士の出征に伴う労働力不足を補うため、新たに様々な職業で働くことを求められた女性の姿を写真週報の記事と体験談を比較する形で紹介した。また、写真週報で白衣の勇者と称えられた従軍看護婦たちの戦地での苛烈な医療活動や凄惨な戦場体験を関係資料とともに紹介した。

【満洲へ渡った女性たち】

満洲国は、写真週報に希望のフロンティアとして様々な形で取り上げられた。そうした宣伝により満洲へ渡った女性たちが終戦後に経験した日本への引揚げ時の苦難についての体験談を紹介した。



満洲へ渡った女性たち



戦時下の婦人会活動



竹槍訓練の様子



戦時下の婦人会資料

【戦時下の結婚・出産・育児】

戦時中の「産めよ、殖やせよ」のスローガンにみられるように、政府が女性たちに将来の兵士・労働者を生む母として、結婚と多産を奨励したことを写真週報で紹介するとともに、新婚の夫の出征や戦死、満足な公的補助のないなかでの出産など、女性が置かれた厳しい現実を体験談などにより紹介した。

【戦時下の婦人会活動】

戦時中、多くの女性たちが参加した戦争協力を目的とする婦人会活動に焦点を当て、写真週報の記事や体験談、国防婦人会・愛国婦人会などの資料から、活動の内容や参加者たちの本音などを紹介した。婦人会として行われた出征兵士の見送りや竹槍訓練の様子をマネキン人形などで再現した。

【エピローグ 『写真週報』に見えないもの】

戦時中、毎日のように行われた出征兵士を見送る姿を撮影した写真が『写真週報』に掲載されていないことに着目し、政府広報誌には載らなかった戦争の本質について来館者に問いかけるとともに、恋人の赤紙を書かなければならなかった佐々木三保子さんの体験談を紹介した。

『戦争がなければ…』では、模型や人形を使って戦争がなかった仮想の戦前の日常の暮らしを表現した。